

統計からみる三豊市合併以前の農業生産の概要

——野菜と果樹栽培に注目して——

An Overview of Agricultural Production in the Mitoyo Area until the Founding of Mitoyo City

Based on Statistical Surveys :

Focusing on Vegetable and Fruit Cultivation

吉田 雄介・平 侑子

YOSHIDA Yusuke & TAIRA Yuko

本研究では、三豊市の地域性を検討するために、三豊市が成立するまでの半世紀にわたる旧町ごとの農業生産の動向を、各種統計資料を利用して、野菜および果樹栽培から検討した。

まず、部門別の農業粗生産額によれば、1970年までは仁尾町と詫間町を除き、米が耕種の中では最大であった。ところが、2004年までには、ほとんどの町で野菜が耕種のうちで最大になった。その野菜に関しては、早い時期に指定産地となったタマネギ、キュウリ、レタスの3品は、かつては大規模に栽培されていたものの、栽培面積を大幅に減らした。それでも、この3品が2004年時点でも三豊地域の主力野菜であった。1960年代後半から70年代初めにかけて、それまで栽培の少なかったハクサイ、キュウリ、ホウレンソウ、キャベツなどが作付面積を増やしたように、この時期に野菜の作目の多様化が進んだ。それ以降も、ニンニクやアスパラガスなどの普及が進んだが、栽培面積を維持できた作目はごく少数にとどまる。その例外が合併直前に急成長し、最大の作付面積を占めるようになったブロッコリーであるが、これは三豊市域全体で栽培されたのではなく、ほぼ豊中町に限られた。

果樹栽培に関しては、1970年代に入るまで全ての町で温州ミカンの普及に努めたため、山地を中心に広大なミカン園が開発された。ただし、平地が多い豊中町や三野町では拡大は限られた。一方、山間地域を多く含む町では開発が進んだ。特に山本町や財田町では、気候を考慮しない無理な温州ミカン園の開発もおこなわれた。その結果は、伐採や改植、あるいは廃園化によるブーム後の急激な結果樹面積の減少であった。

キーワード：三豊市、農業、野菜、果樹、果樹園

Key Words: Mitoyo city, Agriculture, Vegetable, Fruit tree, Orchard

1 はじめに

三豊市はどのような地域なのだろうか。もちろんどう見えるのかは様々であり、三豊市のどの部分に注目するかによっても見え方は異なる。2006年に7町が合併して成立した三豊市は、海から山まで広い範囲を含む多様な場所でもある。本稿では、農業生産の中でも野菜と果樹栽培を中心に、三豊市の状況がどうなっているのかを、様々なデータに基づいて検討してゆこうと思う。そこでできるだけ客観的なデータに基づいて、しかも一時点ではなく、ある程度の時間の幅の中で実情を捉えることが必要になる。それは、現在の地域の姿が、過去の地域の積み重ねの上に成立しているからにはほかならない。

また、三豊市の農業を把握するためには、他の地域と比

べてみることに役立つと考えられる。そこで、かつての三豊郡、すなわち今では観音寺市域に含まれる市町のデータを適宜参照する。なお、三豊市の西南部に位置する観音寺市、大野原町、豊浜町は、三豊市よりも一足先の2005年に合併した。三豊市域内の差異もさることながら、実は、農業の面からは、三豊市域と観音寺市域とは大きく異なることがわかる。

農業に関しては様々な公のデータが収集・公開されている。ここでは、2006（平成18）年1月1日の三豊市の誕生以前に関して、高瀬、山本、三野、豊中、詫間、仁尾、財田の旧7町の主要農産物の情報を中国四国農政局の発行した資料を基に分析する。中国四国農政局は、各県の農業・作物に関する情報を年報として発行してきた。たとえば、香川県については、中国四国農政局香川統計調査事務

所編『香川農林水産統計年報』が発行されている。また、そうした毎年の情報は累年統計として定期的にまとめられている（たとえば、中国四国農政局香川統計情報事務所編 1979；中国四国農政局香川統計情報事務所編 1988；中国四国農政局香川統計情報事務所編 1998；中国四国農政局三豊統計・情報センター編 2006 など）。さらに、これら統計データの解釈の際には、適宜市町村史・誌も参照したい。

順序としては、まず地図を使って三豊市域の概略をみておく（2）。次いで、合併前の三豊市域における農業の一般的な動向を検討する（3）。次にこの地域の野菜と果樹栽培の重要性を検討し、その上で、野菜栽培の動向を三豊市域全体で把握し、さらに各町の違いについて検討する（4.1）。同様に、果樹栽培の動向についても検討をおこなう（4.2）。

2 三豊市域の概要

2.1 三豊市の地形と農業

三豊市は、2006年1月1日をもって7つの町が合併して成立した。実際、当時の市長も「七つの町が合併してできた三豊市だけに、市内でも自分が住んでいる旧町には詳しくても、他の旧町の話は全く初めてで知らないという市民の方が多くいました…」（横山 2016: 188）と述べているが、旧7町のそれぞれの地域の違いもさることながら、一つの町内の自然的な要素の違いも人文社会的な違いも多様である。

その点を確認するために、図1には2015年農林業センサスの水稻の作付面積（ha）を農業集落ごとに示した。さらに三豊市域のDEMデータと河川データを重ねてみた。多様な地形が存在し、水稻は特に平野部で盛んに栽培されていることがわかる。もちろん丘陵や山地を多数の小規模な河川が開削した狭い谷底平野が多数認められ、そこでも

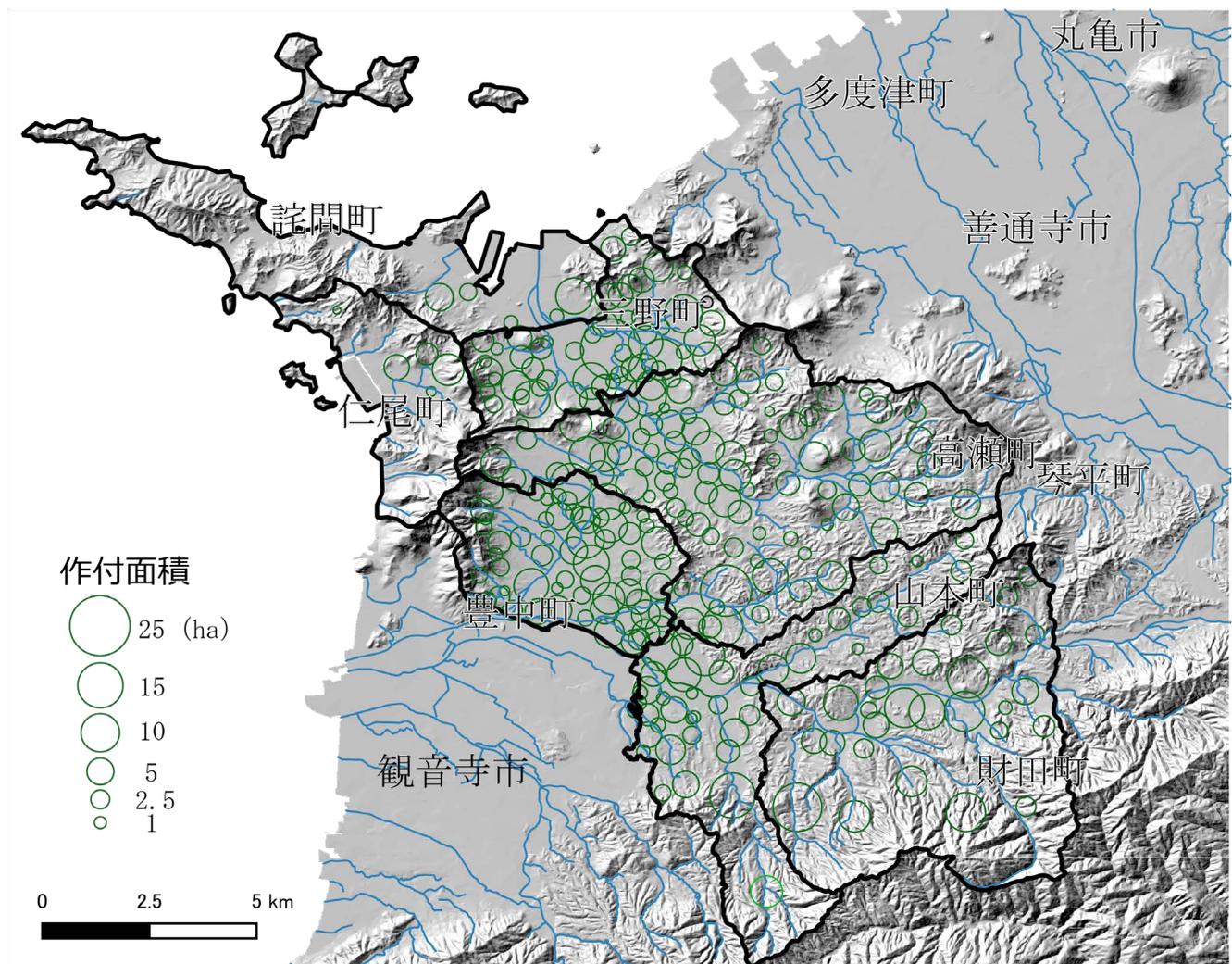


図1 三豊市の農業集落ごとの稲の作付面積（2015年）

出典：2015年農林業センサス、国土地理院基盤地図情報10mメッシュDEMおよび国土数値情報河川データ（平成18年）より作成。

水稲作が盛んである。ただし、三豊市域は東隣の善通寺市や多度津町、あるいは西隣の観音寺市と異なり、まとまった広さの平地が少ない。実際、2020年国勢調査の結果によれば、三豊市近隣の平野部の一部、すなわち善通寺市や多度津町、観音寺市の中心部は人口集中地区に分類されているが、三豊市域には人口集中地区は存在しない。

この地域のまとまった平野としては、いわゆる三豊平野を挙げることができる。三豊平野は、北に流れ詫間港で海に注ぐ高瀬川とその支流、および西に向かって流れる財田川とその支流によって形成された平野である。なお、高瀬川も財田川も2級河川である。財田川の最末端が観音寺市にあたる。まとまった平野が少ない三豊市において例外的に比較的広い平野がみられるのが、北部の三野町や東南部の豊中町であり、ここに円グラフが濃密に分布している。ただ、平野部では、耕地の多くが今では住宅地や道路に転換されている。また、海岸部は人口改変地が多く、一部は工場地帯になっている。

2.2 農業地域区分から見る三豊地域

三豊市の多様性を考えるために、先に農業区分をみておきたい。1970年頃の香川県の農業地域区分では、財田町と山本町は「農山村」に、それ以外の三豊郡の市町は「平地農村」に区分されていた（農林省香川統計調査事務所編1970:2）。後の農業地域区分では、財田町は「中間農業地域」に区分され、平地農業地域と山間農業地域の中間に位置づけられた。なお、三豊郡では、「都市的地域」に区分された観音寺市と先の財田町を除くと、それ以外はすべて「平地農業地域」に区分された（中四国農政局香川統計調査事務所編1994:3）。平地農業地域といっても旧町の町境は山地や丘陵によって画されており、単純に平地農業地域と一括できないのも確かである。また、現在、三豊市では旧仁尾町、旧詫間町、旧財田町の範囲が過疎地域に指定されている（三豊市2021:1）。

このように三豊市をとりまく状況は7つの町が合併したため、多様である。それは過去との比較あるいは統計で確認できるのだろうか。三豊市で栽培される農作物を歴史という縦軸と空間（7つの旧町）という横軸で理解することは、今後の三豊市の地域づくりや地域に根差した観光を考える上でも重要と考える。そこで、以下に、1960年代から合併直前の2004年までの約40年間の三豊の農業の変化と地域性を統計類から確認することにする。

3 農業の全般的な動向

3.1 農業粗生産額の部門別の推移

表1には、養蚕と畜産を除く、耕種の粗生産額を種別に細分した（10年ごとに示したが、2000年については合併前の2004年の数値を示した）。表の左側に粗生産額の実数を、右側に耕種に占める各部門の割合を示した。これを基礎に、現在の三豊市域の農業の変化を把握する。

1970年時点の粗生産額を確認すると、香川県全体では米が最大のシェアを占めた。1970年頃から減反政策が開始されるが、まだ1970年時点では、現在の三豊市の範囲についても米の生産額が、詫間町と仁尾町の2町を除く5町において最大である。ただ、この時点ですでに詫間町では野菜が、仁尾町は果樹が最大のシェアを占めていた。また、三豊郡全体に広げれば、大野原町（現観音寺市）では野菜が最大のシェアを持つようになっていた。

1970～80年の10年間で、香川県全体の農業粗生産額はほぼ倍増する。部門別では、特に野菜（2.4倍）と花き（5.7倍）の伸びが大きいのが特徴である。三豊市域の多くの町では、この伸びを大きく上回った。野菜については、山本町（5.6倍）と仁尾町（5.3倍）の伸びが大きい。1980年になっても、香川県全体では米が最大の地位を占めることに変化はない。三豊市域でも米の地位の変化は少ないが、詫間と仁尾の2町に加え、山本町も米が第1位ではなくなる。一方、現在では観音寺市に合併された1市2町においてはいずれも野菜の生産額が米を上回るようになり、三豊市域に先んじて米からの転換が進んでいた。

次の1980～90年の10年間では、香川県全体の粗生産額の合計にほぼ変化がない。ただし、野菜と花きがともに10年で1.4倍になっているように、作物の構成比率が変化した。三豊市域で香川県全体の伸びを上回ったのが、高瀬と仁尾の2町である。その高瀬町の伸びを引っ張ったのが、野菜（1.5倍）、果樹（1.4倍）、花き（5.1倍）であり、高瀬町では野菜の粗生産額が米のそれを上回った。1990年になると、香川県全体でも野菜が米の生産額を上回り、最大の品目に成長する。三豊市域では、いまだ三野町と豊中町で米が最大のシェアを占めた。なお、三野と豊中町は、先述したように三豊市のなかでも比較的広い平野が広がる地域である。そして2004年になると、米が最大なのは三野町のみになる。

このように、観音寺市域に比べると遅れはしたが、三豊市域においても1990年までには粗生産額で見れば、ほとんどの町で第1位が野菜、第2位が米の順になった。そして、それに匹敵ないしは町によっては上回る粗生産額を有するのが果樹部門である。そこで、本稿では、耕種の中でも野菜と果樹の動向を以下で検討することにしたいと思

表1 三豊郡の市町別の部門別農業粗生産額の推移

1970 (昭和45) 年											単位：百万円		1970 (昭和45) 年											(%)
	米	麦類	雑穀、 豆類	いも類	野菜	果樹	花き	工芸作物	種畜、畜 木、その他	耕種計	養蚕	畜産計	米	麦類	雑穀、 豆類	いも類	野菜	果樹	花き	工芸 作物	種畜、 畜木そ の他			
香川県	16,961	1,368	144	999	9,397	5,676	905	5,346	1,951	42,747	42	18,998	39.7	3.2	0.34	2.3	22.0	13.3	2.1	12.5	4.6			
高瀬町	639	92	3	28	394	316	2	225	87	1,786	-	711	35.8	5.2	0.2	1.6	22.1	17.7	0.1	12.6	4.9			
山本町	316	17	1	9	164	138	9	227	72	953	1	416	33.2	1.8	0.1	0.9	17.2	14.5	0.9	23.8	7.6			
三野町	363	60	2	13	130	81	-	72	36	757	-	391	48.0	7.9	0.3	1.7	17.2	10.7	-	9.5	4.8			
豊中町	424	35	2	9	117	136	14	185	135	1,057	-	674	40.1	3.3	0.2	0.9	11.1	12.9	1.3	17.5	12.8			
詫間町	88	12	2	26	182	50	63	114	16	553	-	277	15.9	2.2	0.4	4.7	32.9	9.0	11.4	20.6	2.9			
仁尾町	39	2	1	8	81	383	24	21	50	609	-	177	6.4	0.3	0.2	1.3	13.3	62.9	3.9	3.4	8.2			
財田町	210	10	1	7	167	175	1	188	91	850	0	183	24.7	1.2	0.1	0.8	19.6	20.6	0.1	22.1	10.7			
観音寺市	856	69	3	54	509	231	14	522	86	2,344	6	1,673	36.5	2.9	0.1	2.3	21.7	9.9	0.6	22.3	3.7			
大野原町	501	38	5	13	585	404	30	361	109	2,046	-	696	24.5	1.9	0.2	0.6	28.6	19.7	1.5	17.6	5.3			
豊浜町	174	19	1	6	156	103	-	101	16	576	-	120	30.2	3.3	0.2	1.0	27.1	17.9	-	17.5	2.8			
1980 (昭和55) 年											単位：百万円		1980 (昭和55) 年											(%)
香川県	28,598	4,249	519	1,560	22,713	9,072	5,128	8,368	2,114	82,321	74	42,177	34.7	5.2	0.6	1.9	27.6	11.0	6.2	10.2	2.6			
高瀬町	1,079	113	27	44	970	635	66	469	44	3,447	-	3,274	31.3	3.3	0.8	1.3	28.1	18.4	1.9	13.6	1.3			
山本町	529	72	9	19	922	261	91	464	282	2,649	-	1,444	20.0	2.7	0.3	0.7	34.8	9.9	3.4	17.5	10.6			
三野町	631	77	15	18	272	184	24	30	12	1,263	-	878	50.0	6.1	1.2	1.4	21.5	14.6	1.9	2.4	1.0			
豊中町	738	73	18	23	329	543	151	219	319	2,413	-	1,348	30.6	3.0	0.7	1.0	13.6	22.5	6.3	9.1	13.2			
詫間町	123	6	5	40	367	106	724	26	8	1,405	-	266	8.8	0.4	0.4	2.8	26.1	7.5	51.5	1.9	0.6			
仁尾町	41	1	4	15	430	603	236	14	30	1,374	-	278	3.0	0.1	0.3	1.1	31.3	43.9	17.2	1.0	2.2			
財田町	331	28	7	16	763	368	12	395	41	1,961	-	1,154	16.9	1.4	0.4	0.8	38.9	18.8	0.6	20.1	2.1			
観音寺市	1,432	151	27	115	1,859	223	107	824	135	4,873	-	5,839	29.4	3.1	0.6	2.4	38.1	4.6	2.2	16.9	2.8			
大野原町	907	63	10	37	2,600	531	165	487	63	4,863	-	1,636	18.7	1.3	0.2	0.8	53.5	10.9	3.4	10.0	1.3			
豊浜町	267	20	3	12	695	222	20	208	17	1,464	-	328	18.2	1.4	0.2	0.8	47.5	15.2	1.4	14.2	1.2			
1990 (平成2) 年											単位：百万円		1990 (平成2) 年											(%)
香川県	24,480	2,890	480	2,110	31,920	9,850	7,010	2,410	1,470	82,620	30	32,680	29.6	3.5	0.6	2.6	38.6	11.9	8.5	2.9	1.8			
高瀬町	890	30	21	69	1,478	870	334	235	99	4,026	-	2,665	22.1	0.7	0.5	1.7	36.7	21.6	8.3	5.8	2.5			
山本町	459	50	7	33	838	183	91	124	113	1,898	-	1,273	24.2	2.6	0.4	1.7	44.2	9.6	4.8	6.5	6.0			
三野町	508	25	11	30	422	174	25	6	10	1,211	-	684	41.9	2.1	0.9	2.5	34.8	14.4	2.1	0.5	0.8			
豊中町	575	34	10	34	400	510	225	55	158	2,001	-	824	28.7	1.7	0.5	1.7	20.0	25.5	11.2	2.7	7.9			
詫間町	108	6	9	55	260	40	554	-	4	1,036	-	186	10.4	0.6	0.9	5.3	25.1	3.9	53.5	-	0.4			
仁尾町	38	-	3	27	348	792	311	4	27	1,550	-	352	2.5	-	0.2	1.7	22.5	51.1	20.1	0.3	1.7			
財田町	310	14	8	28	808	272	20	216	62	1,738	-	984	17.8	0.8	0.5	1.6	46.5	15.7	1.2	12.4	3.6			
観音寺市	1,087	104	15	109	3,535	205	282	65	81	5,483	-	4,811	19.8	1.9	0.3	2.0	64.5	3.7	5.1	1.2	1.5			
大野原町	821	16	6	45	4,668	506	352	31	104	6,549	-	1,796	12.5	0.2	0.1	0.7	71.3	7.7	5.4	0.5	1.6			
豊浜町	263	1	2	21	1,576	288	36	30	61	2,278	-	200	11.5	0.0	0.1	0.9	69.2	12.6	1.6	1.3	2.7			
2004 (平成16) 年											単位：1,000万円		2004 (平成16) 年											(%)
香川県	1,527	83	33	70	2,458	602	506	101	147	5,362		2,658	28.5	1.5	0.6	1.3	45.8	11.2	9.4	1.9	2.7			
高瀬町	53	1	3	2	87	66	24	16	8	260		299	20.4	0.4	1.2	0.8	33.5	25.4	9.2	6.2	3.1			
山本町	28	0	1	1	46	10	3	2	26	116		272	24.1	0.0	0.9	0.9	39.7	8.6	2.6	1.7	22.4			
三野町	30	1	2	1	30	11	2	-	5	80		152	37.5	1.3	2.5	1.3	37.5	13.8	2.5	-	6.3			
豊中町	35	0	1	1	59	28	21	1	4	150		48	23.3	0.0	0.7	0.7	39.3	18.7	14.0	0.7	2.7			
詫間町	5	0	x	1	12	3	28	-	1	x		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
仁尾町	3	-	0	1	14	52	27	-	4	101		26	3.0	-	0.0	1.0	13.9	51.5	26.7	-	4.0			
財田町	21	0	1	1	52	22	2	10	13	121		131	17.4	0.0	0.8	0.8	43.0	18.2	1.7	8.3	10.7			
観音寺市	70	2	2	3	332	18	23	3	9	461		278	15.2	0.4	0.4	0.7	72.0	3.9	5.0	0.7	2.0			
大野原町	45	1	1	2	355	28	27	0	9	467		149	9.6	0.2	0.2	0.4	76.0	6.0	5.8	0.0	1.9			
豊浜町	14	0	x	1	121	18	3	x	1	159		10	8.8	0.0	x	0.6	76.1	11.3	1.9	x	0.6			

出典：『香川農林水産統計』の各年度より作成。

注：2001年から養蚕は畜産に分類されるようになったため、単独の項目がなくなった。「x」は秘匿データ。

う。

なお、表1にあるように畜産も町によっては重要であるが、本稿の検討からは省くことにする。また、三豊地域では戦前は養蚕に必要な桑畑も広い範囲を占めていたが、本

稿で対象とする時期にはすでに衰退していた。あるいは、工芸作物に分類される葉タバコも町によっては非常に広い作付面積を占め重要な換金作物だった時代もあるが、本稿では分析からは省く。また、三豊市域の広大な山林は竹林

で占められているが、野菜に分類されるタケノコも同様にここでは省くことにする。

3.2 耕地面積の変化

耕地面積の変化についても検討しておこう。なお、畑耕地面積は、普通畑と樹園地、牧草地の合計であるが、三豊市域では牧草地はわずかしかなかったため、グラフには示さなかった。

図2には三豊郡の10年ごとの耕地面積の変化を掲げた。これによれば、田の面積はいずれの市や町でも年を追うごとに減少している。ただ、その減少は比較的緩やかである。三豊市域内では、1970年の田の面積の広さは、①高瀬、②豊中、③山本、④三野、⑤財田、⑥詫間、⑦仁尾町の順になるが、2004年になってもこの順に変動はなかった。面積が最大の高瀬町と最小の仁尾町では差は、15倍に及ぶ。

普通畑とは、野菜やイモ、豆類などが栽培される畑のことであるが、1970年時点では詫間町の面積が圧倒的な第1位を占めた。その詫間町では、1980年以降著しい減少を示すものの、2004年になっても三豊市域で最大の面積を維持した。逆に、1970年時点で、三豊市域で普通畑が最も狭かったのが財田町で、2004年になっても変わらず最少だった。先に農業地域区分を確認したように財田町は山がちであるため、谷底平野は水田になっており、自ずと普通畑の面積は限定される。

樹園地の広さは、1970年時点では①高瀬、②財田、③仁尾、④山本、⑤豊中、⑥三野、⑦詫間町の順であった。高瀬町では1970～80年の間に樹園地が3割以上増加したものの、代わりに普通畑が227haから88haへと大きく減じた。山本町でも普通畑の面積が1970～80年の10年で3分の1になり、代わりに樹園地の面積が伸びた。樹園地は、仁尾町を除き全ての町で1970～80年の10年間で大なり小なり面積を増している。仁尾町にしてもわずかに減じたにすぎない。そして、いずれの町においても樹園地は1980年をピークとして減少に転じ、以後は著しい減少を示す。その結果、仁尾町を除くすべての町で、2004年には1980年時点の面積の2分の1から4分の1になった。例外的に、仁尾町の減少は小幅で、1980～2004年の間に3割面積を減らしたにとどまった。これは後述するように仁尾町が柑橘類の適地であるという地理的な理由からに他ならない。換言すれば、仁尾町を含めすべての町で温州ミカンによって山地を開拓して樹園地を広げたものの、ブームの終焉後はそれに代替する果樹を見つけることができなかったことになる。

なお、耕地全体に占める田の比率を1970年と2004年で比較してみると、7町すべてが田のシェアを上昇させた。特に三野と豊中の2町では8割を超えた。これは、田の減少に比べて、普通畑と樹園地の減少のスピードが上回った結果を示している。

一方、観音寺市域では、農業地域区分で都市的地域に区分されていた観音寺市では田の面積が1970～2004年の間に3割減るが、大野原と豊浜町ではそこまでの減少はなかった。普通畑は、大野原町では、1970～90年の間で大幅に面積を増やしたものの、2000年には大きく減少した。これは同町で、野菜の粗生産額が大幅に上昇した時期に当たる。樹園地については観音寺市と大野原町では著しく減少した。つまり、果樹ではなく野菜に特化したことを示している。

この部分を小括しておく、三豊市域の田の面積はいずれの町でも減少はしたものの、比較的緩やかな減少にとどまった。一方で、普通畑は1970年と比較すると、1980年ないし90年に増加した町もみられたが、いずれの町でも2004年までには大きく減少している。樹園地も1970～80年の10年間で大幅に増加させた高瀬町、山本町、財田町などでも、その後は大幅に減少している。これは統計のみでは判断できないが、温州ミカンブームとその後の豊作貧乏による転換や廃園、および生産者の高齢化などが要因であると推測される。

4 野菜と果樹の動向

4.1 野菜の動向

4.1.1 三豊地域全体の動向

まずは野菜の動向を作付面積の変化から検討することにしよう。図3には指定野菜14品目の作付面積の変化をグラフに示した。これを見ると、多くの品目の作付面積が低位に固まっており、作付面積が広い品目は一部に限られることがわかる。また、作付面積の広い品目についても変化が激しいことがわかる。これらはどのような理由から生じたのだろうか。

結論から述べれば、作付面積は、指定野菜に指定されるか否かが左右したようである。1966年に主要野菜の需給安定のために、野菜生産出荷安定法が成立し、指定野菜価格安定対策事業が実施されることになった。これは国、都道府県、生産者の3者が資金を積み立てておき、豊作による価格低落時には生産者への収入の補助金支払うという制度である。この制度による指定野菜は、キャベツ、キュウリ、ダイコン、トマト、ハクサイ、タマネギ(1966年)、ニンジン、ネギ(1967年)、ナス(1968年)、レタス(1979

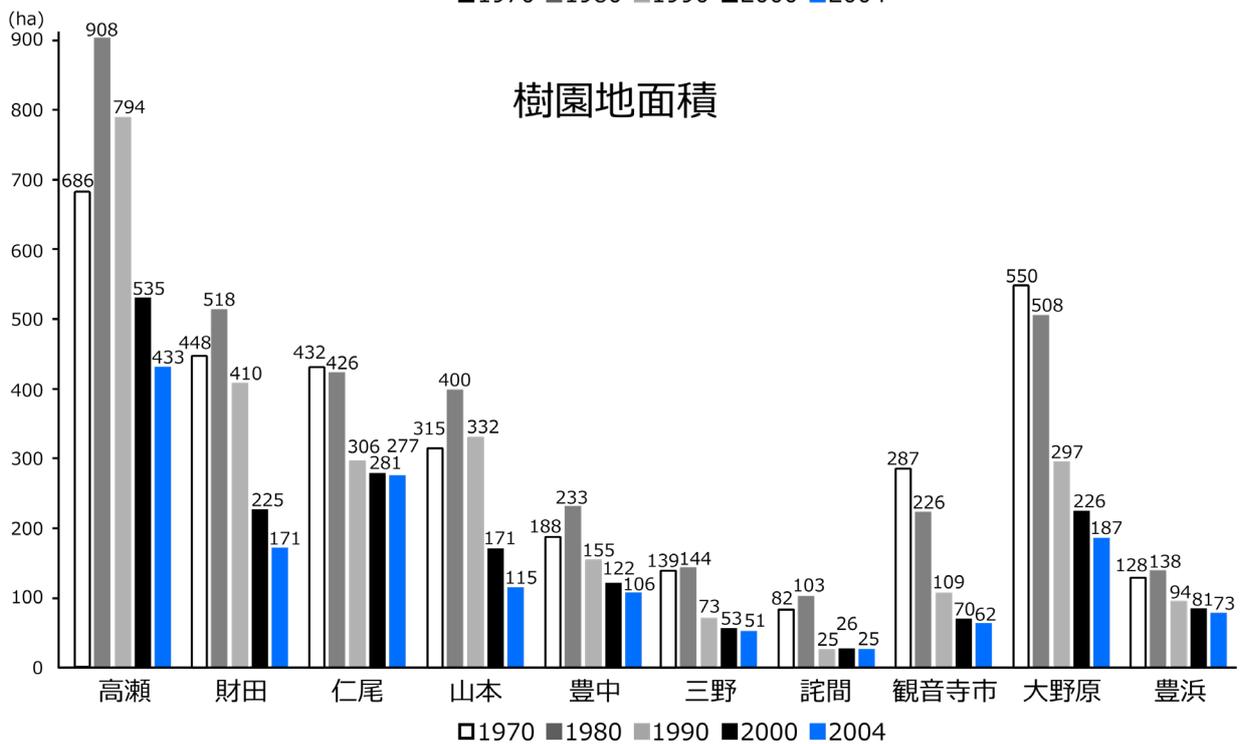
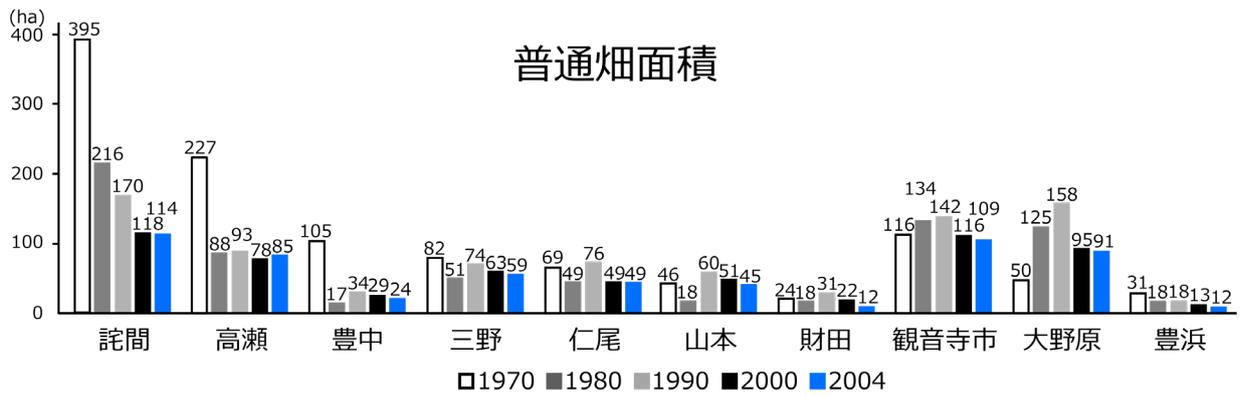
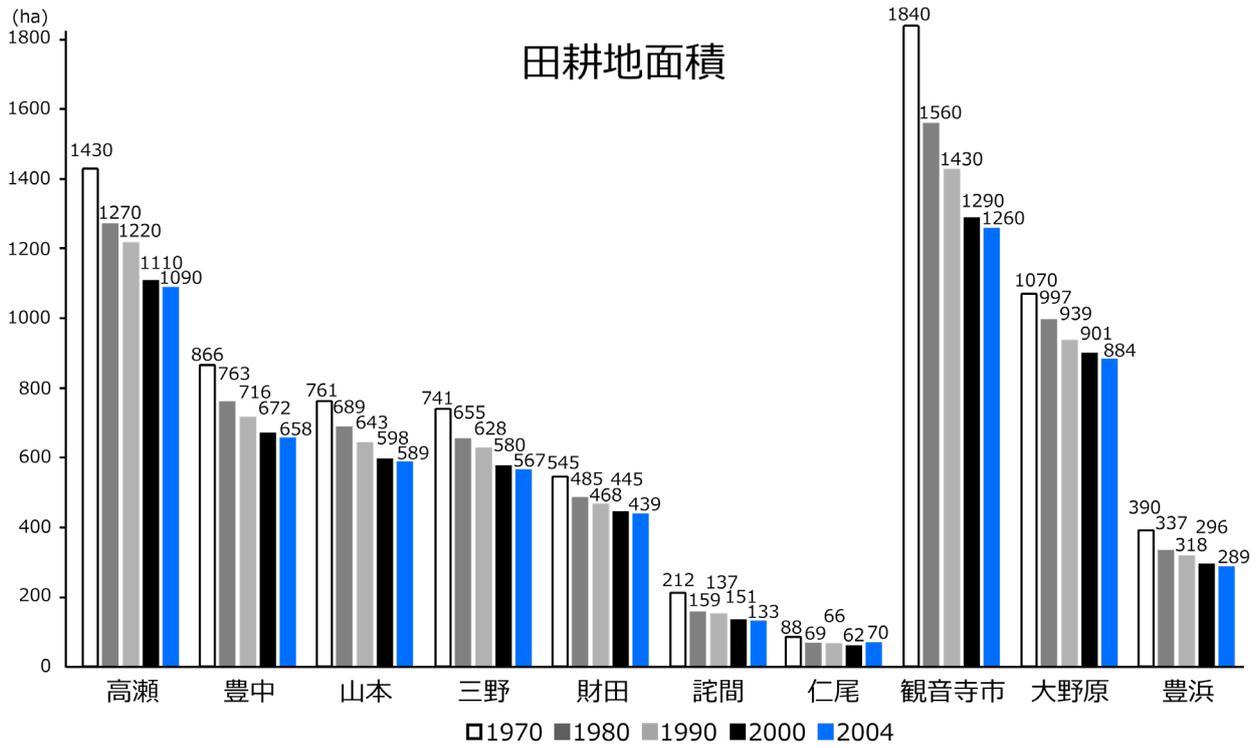


図2 三豊郡の市町別の耕地面積の推移

出典：表1と同じ。

年), ピーマン (1970 年), サトイモ, ホウレンソウ (1971 年), バレイショ (1972 年) と順次拡大し, 今では 14 品目になった (農畜産業振興機構 2011: 5)。ただし, 三豊市の場合, 指定野菜のカバー率は低い。したがって, 制度自体よりも, 全国的に流通量が多く, 消費量も多い野菜ということが生産者にとっては重要なのであろう。

2022 年時点で三豊市では, 春キャベツ, 夏秋キュウリ, 冬春キュウリ, タマネギ, 夏秋ナス, 春ネギ, 夏ネギ, 秋冬ネギ, 春レタス, 冬レタスの 6 種類 10 種別が野菜指定産地に指定されている¹⁾。ただし, 1976 年までに指定されたのは 3 品目で, タマネギ (野菜指定産地名は「三豊」²⁾) は 1966 年に, 夏秋キュウリ (三豊西部) は 1970 年に, 冬レタス (三豊東部) は 1976 年にそれぞれ指定された (香川県農林部園芸特産課編 1983: 58-59)。

先述したように, この指定野菜 14 品目をグラフに示した (図 3)。やはり, 早い時期に三豊が指定産地となったタマネギ, キュウリ, レタスの 3 品は, 合併直前の 2004 年時点になっても野菜の作付面積上位 1~3 位を占め, 変わらず重要品目である。一方, ダイコンは 1960 年代半ばには作付面積がタマネギに次ぐ主力野菜であり, 1967 年には一時的にタマネギを上回った。ところが, ダイコンは指定産地にならなかったため急激に作付面積を減じ, 主力野菜の地位から脱落した³⁾。また, バレイショにしても

1970 年代初めまでは生産量が多かったものの, その後に減少し続けることになる。

早い時期に三豊が指定産地になったこの 3 品目の動向を詳しく見ておきたい。元々最大の作付面積を占めていたタマネギについては, 1980 年代に入ると減少に転じ, 2004 年にはピークの 3 分の 1 にまで減った。三豊地区では, タマネギは重量野菜であることと, 高齢化が進んだことがネックとなり, 栽培面積が減少傾向になった (「農業香川」1992 年 8 月号: 19)。それでも主力野菜であることに変わりはない。

キュウリは, 水田の転作の時期とも重なるが, 指定産地に選ばれてから急激に作付面積を拡大すると, 1970 年代初めにピークに達し, 以後ほぼ 20 年にわたって安定した作付面積を誇った。そして, 1990 年代以降は作付面積がゆるやかに減少する。レタスも指定産地になる以前はほとんど栽培されていなかったが, 指定産地になるや作付面積を伸ばした。1970 年代後半に一時期減少に転じたが, 数年で再び増加に転じ, キュウリの作付面積を抜いた。ただ, 三豊市域のレタス栽培も, 現在の観音寺市域に比べると規模が小さい。実際, 2004 年のレタスの作付面積は, 三豊市域で最大の高瀬町であっても 42ha にすぎない。一方, 観音寺市域では一桁作付面積が大きく, 観音寺市 296ha, 大野原町 501ha, 豊浜町 176ha とレタス栽培に特化して

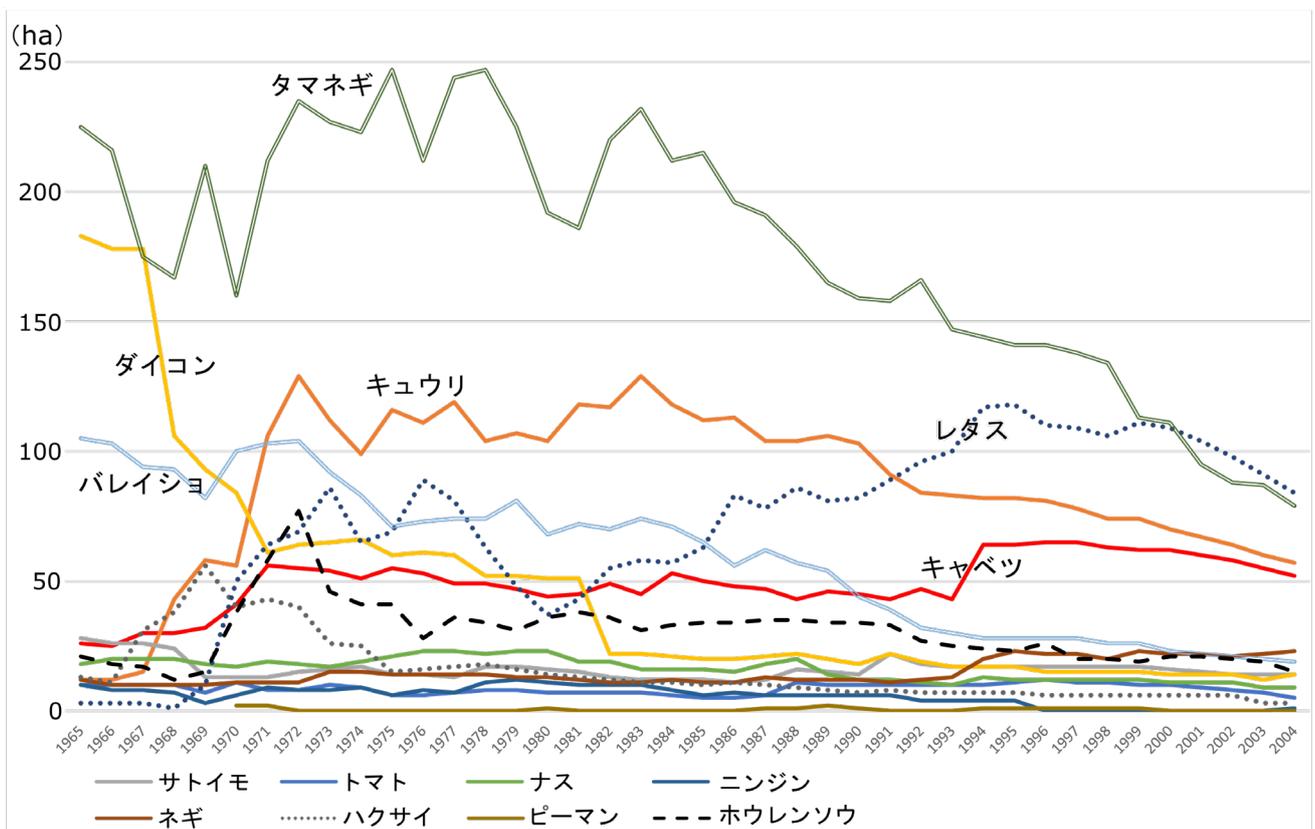


図 3 三豊市域の指定野菜の栽培面積の推移

出典：中国四国農政局三豊統計・情報センター編 (2006) より作成。

いることがわかる。ちなみに『新修大野原町誌』によれば、大野原の野菜栽培の成功は「米以外の作物導入が昭和三十年ごろから始まったことに、成功の原因がある」（新修大野原町誌編さん委員会編 2005: 683）としている。また、この時期は農業に積極的に取り組む若者が多く、これが数年遅れていたら、高度経済成長期の農外収入に惹かれて農業以外へ流れていっただろうとも回顧している。それでも、レタス栽培に行き着くまでには試行錯誤が重ねられた（新修大野原町誌編さん委員会編 2005: 683-4）。

2004年時点の作付面積の上位は、①レタス、②タマネギ、③キュウリ、④キャベツ、⑤ネギ、⑥バレイショ、⑦ハウレンソウの順になる。1965年時点では、①タマネギ、②ダイコン、③バレイショ、④サトイモ、⑤キャベツ、⑥ハウレンソウ、⑦ナスの順であった。両年のリストには多少の差があるが、これは1960年代後半から70年代初めにかけて、それまで作付面積が少なかったハクサイ、キュウリ、ハウレンソウ、キャベツなどが作付面積を大きく増やしたからである。したがって、この時期が三豊市域における野菜の作目の多様化が開始された時期、すなわち野菜栽培の大きな転換期であったことがわかる。ただ、作付面積が拡大した品目の多くも一時的な拡大を示しただけでその後は水準を維持できなかった。

次に、図4には先の14品目以外の主要な野菜の作付面積を示した。こちらの作付面積のグラフにも大きな変化が認められる。

1965年時点である程度の作付面積があったのは、スイカ、サヤエンドウ、イチゴ、カボチャの4品である。そして、カボチャを除くと、これらは2004年になっても作付面積が上位に位置する品目である。ただし、いずれも作付面積を減らしている。特に、イチゴは1960年代後半から急成長し、ピークである1973年の89haに至った。ところが、そこから減じ、1989年以降は一段と減少し2004年には14haになった。なお、京阪神市場におけるイチゴの県別販売シェアは、1988年度までは香川県産が最大であったが、1989年に福岡県に抜かれた（「農業香川」1991年9月号: 42）。

図4では途中から統計にさまざまな品目が現れる。とくにブロッコリーは、1988年に統計に現れた時点ですでに24haの作付面積を誇っていた。1990年代前半は20～30ha前後で安定していたものの、90年代末からさらに拡大し、2004年時点では先のレタスやタマネギの作付面積を上回る三豊市を代表する野菜に短期間で成長した⁴⁾。このブロッコリーの前に急成長したのが、ニンニクやアスパラガスである。ところが、この2品は1980年代の初めか

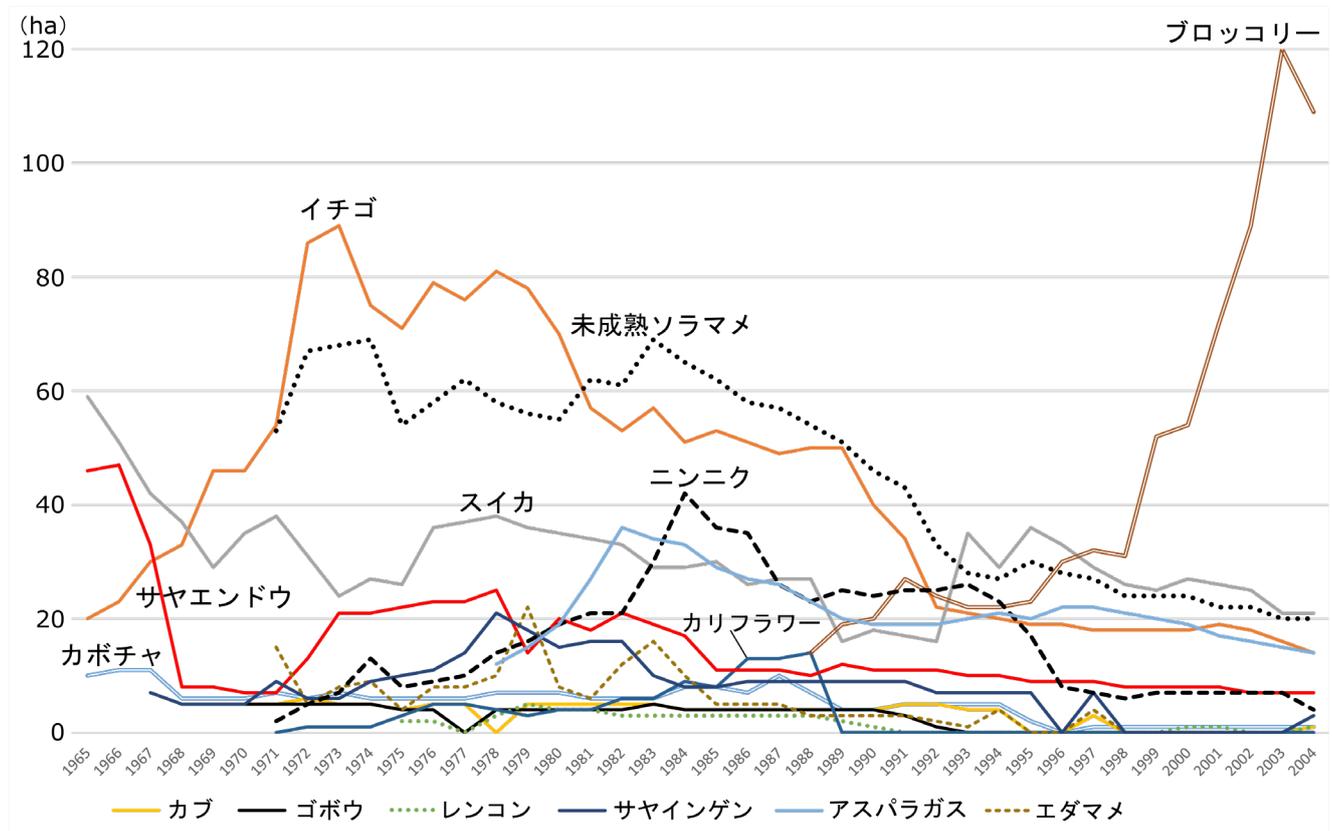


図4 三豊市域のその他の主要野菜の栽培面積の推移

出典：図3と同じ。

ら半ばにかけてピークを迎えるとそこから減少に転じた。カリフラワーも1970年代半ばから順調に成長し、1988年にはピークの14haに広がったものの翌年以降には統計上はなくなった。

以上、さまざまな品目が栽培されはしたが、広く普及した品目はごく少数にとどまることがわかる。また作付面積を拡大したブロッコリーのような一部の品目も、後述するように三豊市全域で普及したわけではなく、特定の地域で盛んであることに注意が必要である。ただ、この野菜栽培の多様性こそが後の産直市の成功につながるはずであるが、この点の検討は本稿の範囲を超える。

4.1.2 野菜と果樹栽培の地域的な特化

ここまで、主要野菜の作付面積の動向を三豊市域全体で確認してきた。ただ、野菜栽培は地域性がきわめて大きく、三豊市域でもその違いは顕著である。そこで、三豊市の合併前の旧町の野菜生産の相違を検討することにする。たとえば、合併直前には最大の作付面積を占めるようになったブロッコリーにしても三豊市全域で栽培されているわけではなく、2004年時点の全作付面積（109ha）中の8割までを豊中町が占めた（後掲の表2）。

まずは粗生産額に占める野菜と果樹部門の比率を検討することで、三豊郡の旧市町のそれぞれの特徴を視覚的に把握しておきたい。

図5には、縦軸に粗生産額全体に果樹が占める比率を、横軸に粗生産額全体に占める野菜の比率を、町ごとに1970、80、90、2004年について示した（なお、詫間町

は2004年分のデータは秘匿データが多いため、2005年のそれを示した）。したがって、グラフの上部に位置するのが果樹に特化した市町で、右手に位置するのは野菜に特化した市町となる。7つの町および現観音寺市域の3市町を見ると、違いが大きいことが分かる。

1970年時点では詫間町を除けば、総じて野菜の比率は低かった。当時すでに野菜比率が3割を超えていた詫間町は年を追って比率を下げた。これは表1を確認すればわかるように、花き突出するようになったためである。逆に、1970、80、90年と野菜比率を上げ、その後2004年に減少したのが高瀬、三野、山本、財田の4町となる。豊中町は、1970年時点では粗生産額に占める野菜の比率も果樹の比率もどちらも低く、特に野菜の比率は三豊市域で最も低かった。そこから10年で、まず果樹の比率が高まった。そして、1990年から2004年の期間に関しては、果樹の比率を低下させたものの、野菜の比率が大幅に上昇し、4割に迫った。これは後述するように豊中町においてちょうどブロッコリー栽培が急速に普及した時期に該当する。

この図で、果樹の比率が特別に高いのが仁尾町で、三豊郡の中では特殊な位置にある。次第に果樹の比率を下げはしたが、2004年でも果樹比率が5割を超えた。また、一時的に野菜の比率が高まったものの、2004年には旧に復している。

観音寺市、大野原町、豊浜町の3市町すべてで、2004年には野菜比率が7割を超え、野菜栽培への特化が著しいことがわかる。香川県全体の野菜比率も年々増加して、ついには5割近く（2004年）に達し、香川県全体でも野

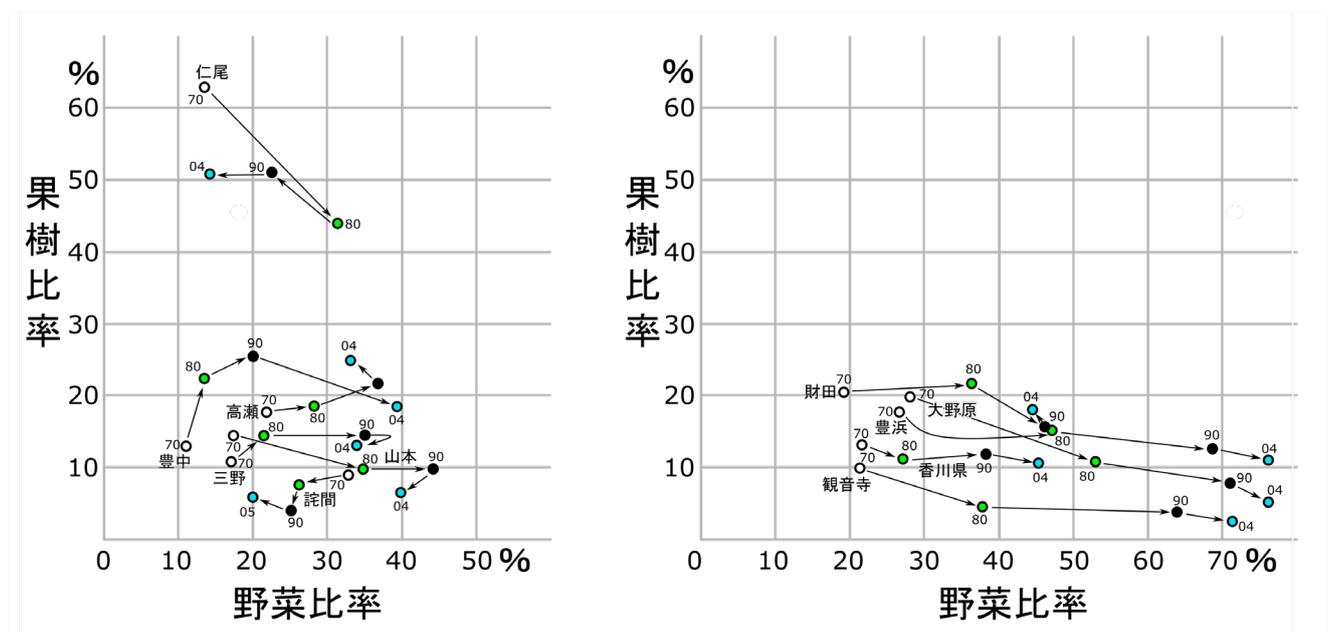


図5 三豊郡の各市町の野菜と果樹面積の比率の推移

出典：表1と同じ。

菜への特化が進んだことがわかる。他方、三豊市域ではここまで野菜の水準が高い町は存在しない。また、香川県全体の果樹比率は低調で、2004年には1割になった。これに比べると、三豊市域では香川県全体や現在の観音寺市域よりも果樹比率の高い町が多いのが特徴といえる。

表2 三豊市の主要野菜の作付面積（2004年）

順位	作物名	作付面積 (ha)	第1位の町名	作付面積 (ha)	%
1	ブロッコリー	109	豊中町	88	80.7
2	レタス	84	高瀬町	42	50.0
3	タマネギ	79	高瀬町	30	38.0
4	キュウリ	57	高瀬町	21	36.8
5	キャベツ	52	高瀬町	44	84.6
6	ネギ	23	高瀬町	7	30.4
7	スイカ	21	高瀬町	15	71.4
8	未成熟ソラマメ	20	高瀬町	6	30.0
9	バレイショ	19	高瀬町	4	21.1
10	ハウレンソウ	15	高瀬町	7	46.7
11	ダイコン	14	高瀬町と財田町がともに3ha		
	イチゴ	14	財田町	6	42.9
	サトイモ	14	財田町	4	28.6
	アスパラガス	14	三野町	4	28.6
15	ナス	9	豊中町	3	33.3

出典：図3と同じ。

4.1.3 野菜栽培の地域性

次に、作物の地域性を確認したい。表2には、2004年時点で作付面積の上位15作物の作付面積と第1位の町名および作付面積を示した（表2）。作付面積が第1位の町を見ると、先に触れたブロッコリーやキャベツのように8割を超える作物もあれば、2割強にとどまるバレイショまで比率はさまざまであるが、総じて第1位の町の比率が3割を超えている。

表2では、高瀬町の名前が15品目中10品目にみられるように、作付面積の点では量の面でも種類の面でも高瀬町が三豊市域の野菜栽培の中心地であることがわかる。実際、三豊市内でも産直市は高瀬町内に集中しており、野菜の栽培と販売が盛んな地区である。一方で、先の図2で確認したように高瀬町は、三豊市域で最大の水田面積を有しており、野菜に限らず農業全般が盛んである。

表3には、2004年時点の作付面積上位の作物を7町ごとに掲げた。先に触れた高瀬町では、作付面積の広い野菜の種類が多く、第5位のスイカも15haと面積が広い。他方、仁尾町ではこれといった面積の広い品目が見当たらない。他の町では、作付面積第1位の品目でこそ作付面積が10haを超えているが、第2位以下の品目になると作付面積は急に少なくなり、町ごとに特定の作物にある程度特化していることがわかる。

表3 作付面積の多い野菜上位5品目（2004年）

	高瀬町		詫間町		豊中町		仁尾町		三野町		山本町		財田町	
	作物名	ha	作物名	ha	作物名	ha	作物名	ha	作物名	ha	作物名	ha	作物名	ha
1	キャベツ	44	タマネギ	11	ブロッコリー	88	イチゴ	3	レタス	24	タマネギ	13	キュウリ	16
2	レタス	42	レタス	3	キュウリ	6	タマネギ, バレイショ, 未成熟ソラマメ, レタス	2	タマネギ	12	キュウリ	10	タマネギ	8
3	タマネギ	30	ダイコン, バレイショ	2	ネギ	6			アスパラガス, ブロッコリー, 未成熟ソラマメ	4	ブロッコリー	8	イチゴ, ブロッコリー	6
4	キュウリ	21			アスパラガス, サトイモ, タマネギ, ナス, バレイショ, 未成熟ソラマメ, レタス	3					レタス	7		
5	スイカ	15	キャベツ, サトイモ, サヤインゲン, サヤエンドウ, ナス, ネギ, 未成熟ソラマメ, 未成熟トウガラシ	1							ハウレンソウ	5	スイカ, サトイモ	4

注：複数の品目が書かれている場合は、各品目の作付面積を示す。たとえば、詫間町の3位の場合は、ダイコンとバレイショが各2haである。

出典：図3と同じ。

ここでの各町からの検討からわかった点を簡単にまとめておこう。要するに、合併直前では、ブロッコリーという新しい野菜が急速に作付面積を伸ばしたが、それは三豊全体ではなく、豊中町域に限られた。この新しい作物の普及により豊中町では、生産額に占める野菜の比率が大幅に上昇した。また、高瀬町を除けば、一定以上の作付面積のある品目を複数有する町はほとんど存在しない。その点で、高瀬町は三豊市における野菜栽培の中心地域といえる。

4.2 果樹・果実の動向

4.2.1 三豊地域全体の動向

三豊市は現在、自らを「フルーツ王国」と謳い、ビワ、ブドウ、モモ、オリーブ、柑橘、キウイやイチゴなど、豊富な果物を地域の魅力の一つとして発信している⁹⁾。三豊市は、地形や気候など自然条件が異なる7つの旧町が合併してできた広大な地域であることから、それが「フルーツ王国」としての種類の豊富さを支える所以となっていると考えられる。本項では、野菜と同様に果樹についても中国四国農政局三豊統計・情報センター編（2006）および中国四国農政局香川県統計情報事務所編（1994）の統計を中心に、三豊市の果樹栽培の変遷を検討する。その際、各旧町史・誌類を随時参考にして、情報を補足していきたいと思う。

図6は、現在の三豊市の範囲で全体の果樹の結果樹面積を作目別に示したグラフである。一目でわかるように、期間全体を通じて、突出しているのがミカンである。ただし、三豊市域のミカンの結果樹面積は、1975年の1,697haをピークに減少が続き、1990年代に入ると落ち着いたものの、2004年にはピーク時の3分の1に満たない504haになった。ミカンを除く果樹に関しては、全体として結果樹面積が200ha以上の作目は存在しない。1980年代に入り新しく栽培されるようになったキウイフルーツもそれほど面積的には広がらなかった。三豊市域では様々な果樹が栽培されているが、面積的には今でも温州ミカンが主力である。

次に、地域ごとのミカン栽培の変化を検討するために、三豊市の範囲だけでなく、旧三豊郡の旧市町別の結果樹面積の推移を図7に整理した。ミカンの栽培が盛んな地域は、大野原、仁尾、高瀬の3町であった。1970年代前半のピーク時に最も広い結果樹面積を持っていたのが大野原町（現観音寺市）で、1975年には500haを超えていた。仁尾町は、ピーク時は400haと大野原町ほどではないが、減少が他の地域と比べて緩やかであり、1980年代の初めに大野原町と逆転した。一方、豊浜町（現観音寺市）や詫間町、三野町、豊中町はピーク時でも100ha前後にとどまった。しかし、全体を見ると、すべての町でミカンの栽培がおこなわれており、旧三豊郡内ではどこか特定の地域だけ

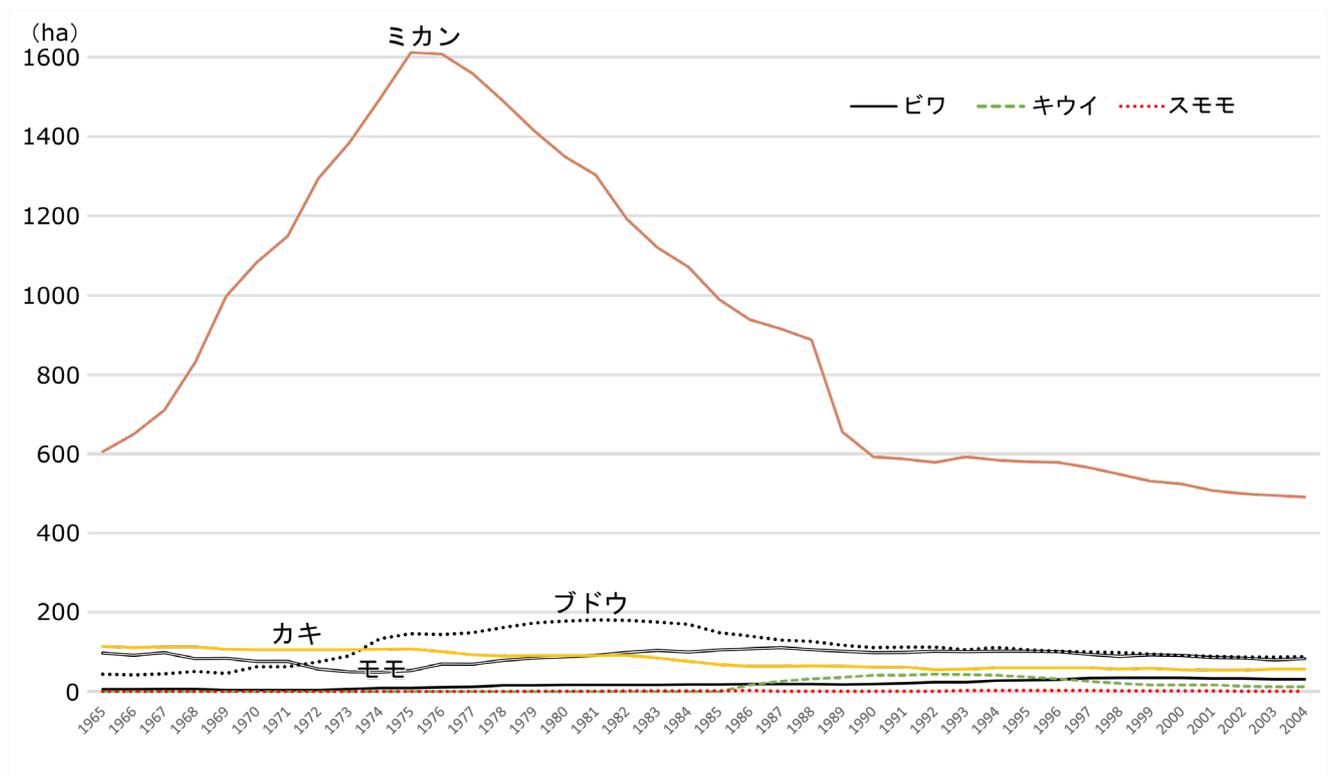


図6 三豊市域の作目別結果樹面積の推移

出典：図3と同じ。

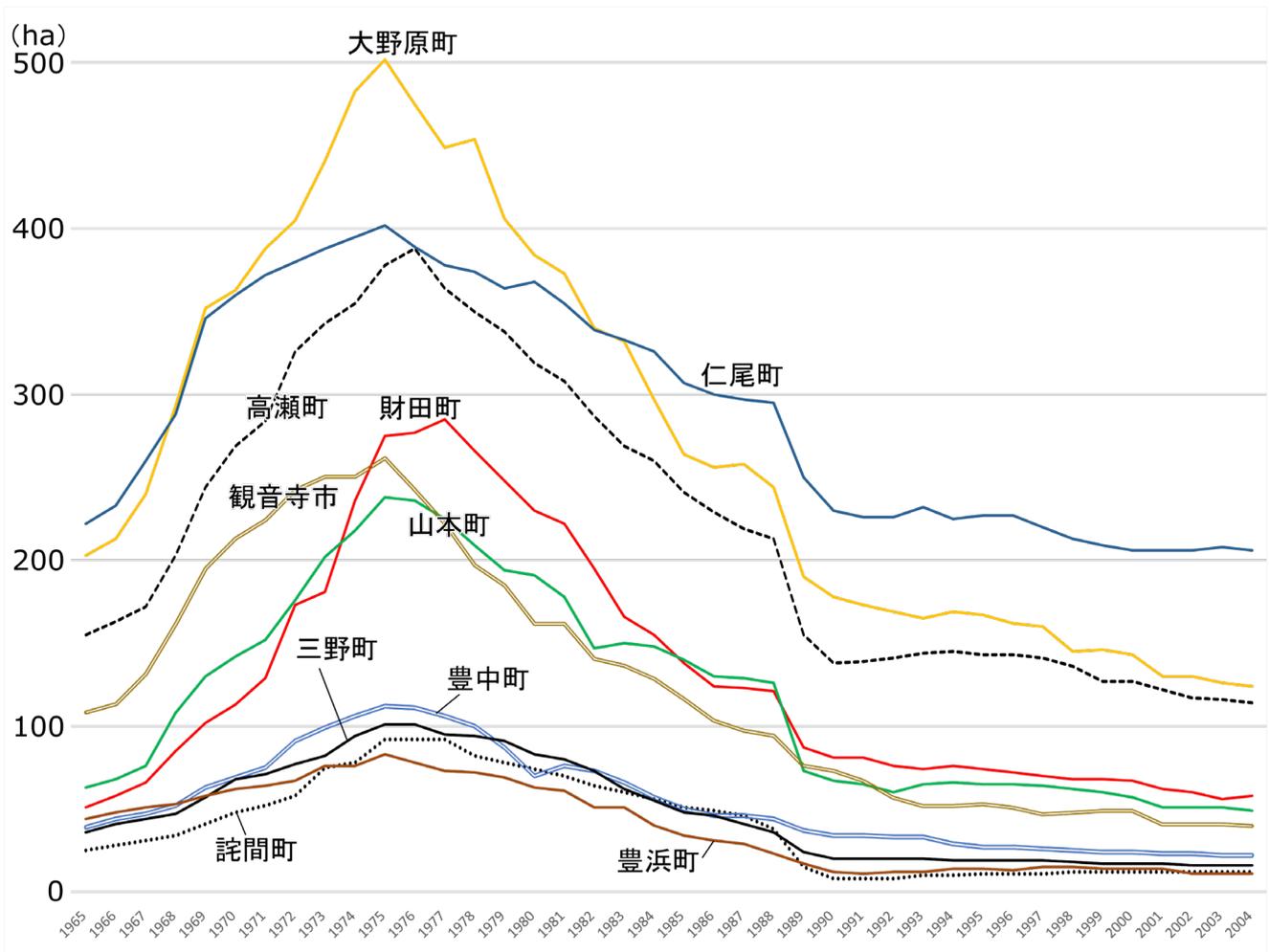


図7 三豊郡のミカンの結果樹面積の推移

出典：図3と同じ。

がミカン栽培を担っていたわけではないことも、このグラフから読み取れる。逆にいえば、後述するように、地域差を無視した一律のミカン園の支援・拡大ともいえる。

4.2.2 温州ミカン栽培の動向

ここまで見たように、1965年以後の旧三豊郡における果実の栽培は、(温州)ミカンが中心であった。旧三豊郡の温州ミカン栽培の歴史は、江戸期にさかのぼる古い歴史を持つ(香川県農業史編纂委員会編 1977: 801-802)。ただし、ここではミカン栽培が三豊全域で拡大する戦後の動向を検討しておく。

1962年と63年に、三豊市域のすべての町で、ミカンを共通基幹作物とした農業構造改善事業が実施された(香川県農林部園芸特産課編 1973: 18)。これによりミカン園造成と同時に、集出荷施設、貯蔵施設等などの整備も拡張され、たとえば仁尾町では、1961年に県下で最初の大型選果場が設置された(仁尾町誌編さん委員会 1984)。結果樹面積はいずれの町でも1960年代から70年代前半に

急拡大した。香川県全体でみると、結果樹面積のピークは1975年である。三豊市の旧町でも、先の図に示されたように1975~77年が最大であり、ピークの時期にほぼ差はない。

こうして拡大したミカン畑が、元々は米の作れない場所をミカン畑として開墾したことには注意が必要である。そのため三豊市の中でも平地の多い豊中町や三野町では、拡大は限られた。一方、1965年と75年の結果樹面積を比較すると、山地の多い地域である財田町では三豊市域で最大の5.2倍に、それに次ぐ山本町が3.7倍に増加した(後掲の表5を参照)。ところが、気象的不良園は三豊市域の他の町ではほとんど見られないものの、山本町と財田町では1973年時点でもそれぞれ20.0haと10.0haと多かった(香川県三豊農業改良普及三豊農業改良普及協議会 1974: 50)。後になっても状況は変わらず、山本町と財田町のミカン園については内陸に位置するため低温や日照不足などに由来する果実の品質の問題に悩まされ(香川県農林部 1980: 44)、無理をしたミカン園の拡大だったことがわかる。その結果、山本町と財田町では1970年代中頃に

結果樹面積がピークをつけてからから急に減少した。

先述したように 1970 年代に入るまでは、ミカン園の拡大が奨励され、三豊のみならず全国で争うように開墾が進み、生産過剰になった。そして、1972 年に全国的にミカンの大豊作がおこると、ミカン価格が暴落し、生産調整や摘果運動の末、1975 年以降はミカン樹の伐採・伐根・転作等を行うことで適切な栽培面積を目指すこととなった（香川県農業史編纂委員会編 1977: 811-812）。ただ、1975 年から 78 年まで温州ミカン改植等促進緊急対策事業が実施されたが、若木園の成園化などのせいで、それほど減産は進まなかった（香川県農林部園芸特産課編 1983: 23）。さらに需給均衡をはかるために、1979 年から 83 年まで温州みかん園転換促進事業が実施され、伐採、改植、高接更新により他の作物への転換を促進した。

表 4 には、ミカン園が大幅に減少していった時期に該当する 1983 年度から 90 年度に、現在の三豊市域において実施された温州ミカンに関する国と香川県の主要な果樹振興対策事業を整理した。1985 年度の事業では、伐採や伐採・抜根・整地も大規模に実施され、特に財田町・山本町では 19ha 以上と大規模な実施であった。

なお、表中の「高接」などは、良い品種の穂木を取ってきて木に接ぐことである。ただ、活着し伸びるまでに、3・4 年はかかるので、その間の生産はない。したがって、高接ぎの目的は良質の品種に改良することであるが、結果的に生産調整の役割も果たすことになる。また、新品種の改植も植えてから 6 年目くらいから少しずつ実がなり始め、普通に収穫できるようになるには 10 年はかかる。

4.2.3 その他の果樹と各町の果樹栽培の動向

この主力果樹である温州ミカンを生産温州と普通温州に 2 分してみよう。表には示していないが、香川県全体でみると、早生温州は 1975 年の 1,580ha から 1992 年の 828ha へとほぼ半減した。他方、普通温州は 1975 年の 3,710ha から 1992 年の 987ha へと 4 分の 1 になった。同様に、表 5 に示されるように、三豊市域の町に関しても早生に比べて、普通温州の減り方が著しい。

温州ミカン以外の柑橘類、いわゆる中晩柑の動向についても確認しておこう。ナツミカンは以前から一定の面積で栽培がなされていた。一方で、ハッサク、イヨカン、ネーブルオレンジに関しては、三豊市域では従来ほとんど栽培されていなかった。その後、温州ミカンの転作作物として導入が試みられたものの、それほど栽培は進まなかった。1995 年時点では、ナツミカンは三豊市域全体で 16ha のうち高瀬町(6ha)が最大である。同様に 1995 年時点では、

ハッサク(32ha 中 12ha)、イヨカン(60ha 中 19ha)、ネーブルオレンジ(24ha 中 5ha)のいずれも高瀬町が最大で、中晩柑類は高瀬町を中心に導入された(中国四国農政局香川統計情報事務所編 1998)。したがって、転作の水準は最大の高瀬町においてさえこの程度にとどまった。先述したように財田町と山本町では地形的・気候的な制約から、温州ミカンの品質が悪く、その対応策としてカキ、モモ、ネーブル、ハッサクなどへの転換が計画されていた(香川県農林部 1980: 44)。これも数字を見る限りは計画通りには進まなかったことがわかる。

ミカンに次ぐ面積を誇る果樹はブドウである。ブドウは、ミカンと異なり、平地ないし山寄りの平地で露地栽培ないしハウス栽培されている。高瀬町や三野町では稲作転換事業として導入が進み、高瀬町では 1974 年に結果樹面積を増やすと、それ以降は 30ha 前後を維持した。

豊中町では、1950 年に養蚕の衰退にともない七宝山の山麓の桑山地区にブドウが初めて導入された(香川県農林部園芸特産課編 1983: 192)。最初はデラウェア・キャンベル種が導入され、1955 年にネオマスカットが導入されたことにより本格的な増植が始まり、さらに 1965 年頃からネオマスカットのビニール被覆栽培が始まったことで高収益を上げるようになった(豊中町誌編纂委員会 1979: 140)。このように最初から新品種を積極的に導入し、香川県下最大の産地に成長した。1978 年に結果樹面積が 100ha に達すると、ピークである 1982 年には 122ha になった。ところが、それ以降は減少し、2004 年には 46ha にまで減った。この結果、高瀬町と豊中町の面積の差は縮小した。ただ、ネオマスカットやマスカットベリー A などは豊中町以外ではほとんど栽培されておらず、三豊市では豊中町が積極的に新品種を導入するブドウ栽培の中心地であることがよくわかる。ピオーネに関しては豊中町と並んで高瀬町の結果樹面積も多い。

ブドウで、豊中町と高瀬町に結果樹面積で続くのが、三野町であり 1970 年代半ばからブドウの結果樹面積が増えている。これは 1970 年以降、水田再編対策で、稲作転換事業として山寄りの水田でヒロハンプルグ種のブドウが導入され、この時期に収穫が可能になったためである(香川県農林部 1980: 48)。

三豊地域のモモ栽培は、缶詰会社が苗木の無料配布を行い、契約栽培を実施したために拡大し、1960 年ごろにピークに達した。ところが、直後の 1962 年頃に加工製品の不振により、多くがミカン園に転換された。1972 年に高瀬町麻地区で山林 28ha を開発しモモの集団産地が形成されると、栽培面積が再び増加した(香川県農林部園芸特産課編 1983: 190)。

表4 温州ミカン関連の果樹振興対策事業（1983～1990年度）

うんしゅうみかん園転換対策事業

実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	事業内容（単位：ha）		事業費 （万円）	補助金 （万円）
				伐採改植	高接更新		
1983年度	みかん園転換	観音寺農業協同組合	仁尾町	5.5	1.8	610	453
		高瀬農業協同組合	高瀬町・三野町	7.5	1.3	820	629
		香川麻農業協同組合	高瀬町麻	3.1	0.8	313	232
		豊中農業協同組合	豊中町	2.5	2.4	355	246
		宝山農業協同組合	山本町・財田町	4.6	0.5	557	440

かんきつ産地再編整備特別対策事業

実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	事業内容（単位：ha）		事業費 （万円）	補助金 （万円）		
				改植・高接	作業道				
1984年度	みかん園転換 集出荷施設土 地基盤整備地	仁尾町	仁尾町曾保地区	12.5	221m	2,141	1,330		
			仁尾町仁尾地区	10.1					
実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	伐採	伐採・抜根・整地	高接	植栽	事業費 （万円）	補助金 （万円）
1985年度	みかん園転換	高瀬農業協同組合	高瀬町・三野町	1.3	1.4	0.8		354	203
		香川麻農業協同組合	高瀬町麻地区	2.1	3.4			663	400
		豊中農業協同組合	豊中町	0.2	2.3	0.2		339	227
		仁尾町	仁尾地区	2.8	0.4	0.2	1.3	564	360
		宝山農業協同組合	曾保地区	1.0	0.1		1.5	368	246
1986年度	みかん園転換	仁尾町	財田町・山本町	4.0	15.4	18.0		3,517	2,128
1986年度	みかん園転換	仁尾町	仁尾町	2.3	0.9		2.4	849	561

かんきつ産地緊急対策事業

実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	事業内容	事業費 （万円）	補助金 （万円）
				農道整備		
1989年度	小規模土地 盤整備	仁尾町	仁尾町仁尾	118m	694	384

県臨空型園芸産地等育成事業（新栽培技術）導入事業

実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	事業内容	事業費 （万円）	補助金 （万円）
				ボックス栽培（ボックス数）		
1986年度	ボックス栽培	高瀬ミカンボックス栽培研究会	高瀬町	1,400	280	90
		高瀬東部ミカンボックス栽培研究会	高瀬町	1,200	270	90
		三野ミカンボックス栽培研究会	三野町	1,200	270	90

県かんきつ産地緊急整備事業（優良品種特別改植事業）

実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	事業内容（単位：ha）		事業費 （万円）	補助金 （万円）
				条間改植	全面改植		
1988年度	小規模土地 盤整備	宝山農協	山本町		0.9	338	161
		仁尾町みかん研究会	仁尾町	0.6	1.4	644	308
1989年度	小規模土地 盤整備	高瀬かんきつ営農組合	高瀬町	0.3	1.3	446	200
		仁尾町かんきつ優良品種特別改植部会	仁尾町	0.1	1	373	180
		宝山農協	財田町	1.1		454	190
1990年度	小規模土地 盤整備	高瀬優良かんきつ生産組合	高瀬町		3.2	1020	459
		宝山農協	山本町		1.9	784	342
		宝山農協	財田町		4.3	1755	765

県かんきつ産地緊急整備事業（かんきつ産地施設化促進事業）

実施年度	工事名	実施主体名	施工場所	事業内容	事業費 （万円）	補助金 （万円）
1989年度	生産管理用機 械施設	桜ノ木ハウスみかん組合	高瀬町	栽培温室6棟、加温施設	3153	833
1990年度	生産管理用機 械施設	仁尾町温室ミカン生産組合	仁尾町	栽培温室8棟、加温施設	3603	927

出典：香川県園芸特産課編（1993:51-63）より作成。

表5 主要果樹の結果樹面積の推移（1965～2004年）

ミカン		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町	157	271	286	328	345	357	380	390	366	352	340	321	310	289	271	262	243	231	221	215	157	140	145	129	116
山本町	65	144	154	178	204	220	240	238	227	221	196	193	180	149	152	150	142	132	131	128	75	69	67	59	51
三野町	38	70	73	79	84	96	103	103	97	96	93	85	82	75	64	57	50	48	43	38	26	22	21	19	18
豊中町	41	71	77	93	101	108	114	113	108	102	89	72	78	75	68	59	52	48	48	46	39	36	29	26	24
詫間町	27	50	54	60	77	80	94	94	94	84	80	76	72	66	62	58	53	51	48	40	17	10	13	14	14
仁尾町	224	362	374	382	390	397	404	391	380	376	366	370	357	341	335	328	309	302	299	297	252	232	229	208	208
財田町	53	115	131	175	183	238	277	279	287	268	250	232	224	197	168	157	140	126	125	123	89	83	76	69	60
ミカン（早生温州）		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町							106	117	118	115	116	115	114	109	108	102	95	88	87	86	73	70			
山本町							58	58	58	53	53	60	60	53	52	50	44	41	41	40	27	27			
三野町							21	21	21	21	21	21	21	19	15	14	13	12	12	10	9	8			
豊中町							24	24	24	21	20	20	20	19	16	13	12	11	11	11	10	10			
詫間町							36	36	36	32	31	31	31	29	29	27	25	24	24	24	14	8			
仁尾町							120	120	117	119	116	118	116	116	113	107	105	106	106	104	99	97			
財田町							109	111	119	113	107	107	104	99	77	66	54	49	49	48	38	37			
ミカン（普通温州）		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町							274	273	248	237	224	206	196	180	163	160	148	143	134	129	84	70			
山本町							182	180	169	158	143	133	120	96	100	100	98	91	90	88	48	42			
三野町							82	82	76	75	72	64	61	56	49	43	37	36	31	28	17	14			
豊中町							90	89	84	81	69	52	58	56	52	46	40	37	37	34	29	26			
詫間町							58	58	58	52	49	45	41	37	33	31	28	27	24	16	3	2			
仁尾町							284	271	263	257	249	252	241	225	222	221	204	196	193	193	153	135			
財田町							168	168	168	155	143	125	120	98	91	91	86	77	76	75	51	46			
ブドウ		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町	6	5	5	7	9	28	29	30	31	31	31	31	31	31	34	33	31	31	34	35	33	32	33	31	32
山本町	2	2	2	2	2	2	3	2	2	3	3	3	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
三野町	4	3	3	4	5	14	14	16	16	16	17	16	16	15	16	16	15	15	15	15	14	13	10	8	8
豊中町	26	48	48	55	67	81	89	85	90	100	110	118	121	122	116	114	97	90	77	73	66	62	60	50	46
詫間町	1	4	4	5	5	7	8	8	8	8	8	8	8	8	6	5	4	2	2	2	2	2	2	2	2
仁尾町	4	0	0	1	1	1	1	2	1	2	2	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
財田町	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	—
ネオマスカット		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町							2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
山本町							2	2	2	3	3	3	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
三野町							1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
豊中町							28	30	35	39	43	8	49	50	50	50	43	41	32	28	25	23			
詫間町							—	—	—	—	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
仁尾町							0	1	0	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
財田町							—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モモ		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町	40	40	40	33	28	26	28	43	40	43	43	44	46	49	52	53	59	61	65	64	60	57	61	58	51
山本町	11	2	2	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	5	5	6	6	6	7	7	7	7	5	2	2
三野町	9	12	13	10	9	9	9	8	8	12	13	14	15	16	17	15	13	15	13	11	11	10	10	8	8
豊中町	13	4	4	0	0	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
詫間町	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0
仁尾町	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0
財田町	23	18	17	13	12	13	14	18	19	23	25	26	27	28	29	25	26	25	25	23	23	23	25	22	21
カキ		(単位：ha)																							
	1965	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1995	2000	2004
高瀬町	30	23	23	23	23	23	24	23	21	20	20	20	20	20	20	19	16	15	15	15	15	16	25	23	25
山本町	18	12	12	12	12	12	12	12	9	7	7	7	7	7	7	5	4	3	2	3	3	2	2	1	1
三野町	5	5	5	5	5	5	5	4	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	3	4	3	
豊中町	3	4	4	4	4	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
詫間町	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
仁尾町	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1
財田町	54	58	58	58	58	59	59	55	55	55	56	56	56	57	51	45	42	41	41	42	41	39	26	24	25

出典：中国四国農政局三豊統計・情報センター編（2006）、1975から90年の早生・普通温州およびネオマスカットについては、中国四国農政局香川県統計情報事務所編（1994）より作成。

その他、財田町ではカキがわずかに目立っている。財田町では、大正時代から富有柿が植えられるようになり、「財田富有がき」は紅が濃く、果肉のうまさで名を高くしたといわれている（新修財田町誌編纂委員会 1992: 572）。ミカンの価格暴落後は、カキ栽培の見直しが始まり、富有柿以外の早生種も導入されるようになった。近年は、水田の転作用に西条柿を導入したり、その他の新品種の導入にも注力している（財田町誌編纂委員会編 2005: 112）。

以上、本項では 1965 年から 2004 年にかけての三豊地域の果樹栽培の推移を見てきた。あくまでも結果樹面積という数字の面で見ると、三豊地域で栽培されてきた果樹は抜きん出て温州ミカンが多い。そして、1970 年代半ばにミカン価格が暴落したのを機に、現在ミカンが特産物となっている仁尾町を除き、結果樹面積は激減していく。その一方で、各町の様子を見ても、ミカン栽培を代替するような果物は、豊中町のブドウを除いて現れておらず、データ上では各町の果樹栽培面積は減少の一途をたどっている。

5 おわりに

以上、統計類を中心に確認したように、三豊地域の多様性は、野菜・果樹栽培の側面からも確認できた。

まず、部門別の農業粗生産額によれば、1970 年までは、仁尾町と詫間町を除き、米が耕種の中では最大であった。それが合併直前の 2004 年までには、米が耕種の最大の粗生産額を占める町は三野町のみになり、ほとんどの町で野菜が最大になった。この点では、合併直前には、農業の構造は同じようになった。ただ、現在の観音寺市域の 1 市 2 町ではすでに 1980 年時点には野菜が耕種で最大の生産額を占めるようになっていたように、三豊市域に先んじて米からの転換が進んだ。香川県や現在の観音寺市域では、野菜への特化が進んだ代わりに果樹への特化が進まなかった。一方、三豊市域では野菜栽培への特化はそれほどではないが、果樹栽培の比率も高い。

このように野菜あるいは果樹栽培が耕種の中で最大になったものの、耕地を田、普通畑、樹園地に分けた場合、1970～2004 年の間で、いずれの町でも田の面積はそれほど減少しなかった。他方、多くの町では、田よりも畑や樹園地の減少率が大きかった。その点で、野菜や果樹栽培は面積的には衰退しつつあることがわかる。

野菜に関しては、早い時期に三豊地域が指定産地となったタマネギ、キュウリ、レタスの 3 品は、かつては大規模に栽培されていたものの、合併直前までに栽培面積は大幅に減少した。特にタマネギの栽培面積の減少が著しい。

それでも、この 3 品は 2004 年時点でも三豊地域の主力野菜であった。そして、ブロッコリーの栽培面積が合併直前に急増した結果、野菜の中で最大の作付面積を占めるようになった。

1960 年代後半から 70 年代初めにかけて、それまで作付面積の少なかったハクサイ、キュウリ、ハウレンソウ、キャベツなどが作付面積を増やしたように、この時期に野菜の作目の多様化が進んだ。それ以降も、ニンニクやアスパラガス、カリフラワーなどの導入が進み、一時期は生産量を伸ばした。しかし、その後も栽培面積を維持できた作目はごく少数にとどまる。その例外がブロッコリーである。そして、ブロッコリーは三豊市域全体で栽培されているわけではなく、特定の地域で盛んであることには注意が必要である。

2004 年時点では、豊中町が栽培面積の 8 割を占めたブロッコリーを除くと、高瀬町がレタスの 5 割、タマネギの 4 割弱、キュウリの 4 割弱、キャベツの 8 割以上を占めた。これが示すように、合併時点では高瀬町が三豊市域における野菜栽培の中心であったといえる。

果樹栽培に関しては、1970 年代に入るまで全ての町で温州ミカンの普及に努めたため、いずれの町でも広大なミカン園が開発された。平地が多い豊中と三野の 2 町では拡大は限られた一方、山間地域を多く含む町では開発が進んだ。特に山本町や財田町では、新たに資本を導入して温州ミカンに向いていないような土地までミカン園化を推し進めた。すなわち気候を考慮しない無理なミカン園の開発もおこなわれた。その結果は、伐採や改植、あるいは廃園化による急激な結果樹面積の減少であった。一方で、山本町や財田町を含むすべての町で、温州ミカンを大規模に代替する果樹や作物は現れなかった。また、他の果樹の結果樹面積も 2004 年にはピーク時から大幅に減少しており、更新がうまく進んでいないことがわかる。

以上、本稿ではあくまでも主要品目の量的な推移を示したにすぎない。たとえば、果樹の面でいえば、山本町や財田町のイチジクなど、数字上には表れにくい少量多品目の果樹栽培に関しては、実態をつかみきれていない。財田町では他にも果樹ではないが、木イチゴの一種であるボイセンベリーという珍しい品種が栽培されている例もある。当然ながらこの種の多様性は、統計からは把握できない。次稿以降では、三豊市で少量ながらも栽培に取り組みされている農作物にも目配りをしつつ、どのように生産、販売、加工されているのかを明らかにしていきたい。

注

- 1) <https://www.maff.go.jp/chushi/seisan/yasaisanti/hyou/kagawa.html>(2022.8.7 最終閲覧).
- 2) なお、この「三豊」は、現在の三豊市の範囲より広い三豊郡の範囲、すなわち観音寺市、高瀬町、山本町、三野町、大原野町、豊中町、詫間町、仁尾町、豊浜町、財田町の範囲になる。また、三豊西部が現在の観音寺市域、三豊東部が三豊市域に該当する。
- 3) 坂は、全国的な野菜生産・消費を分析し、ダイコンなどの生産の減少の一因が漬物消費の減少にあるとしている（坂 2021: 40）。
- 4) 現在財田町でブロッコリーを栽培している農家に聞き取りしたところでは、ブロッコリーに関しては畝のこしらえも、苗を植えるのも、除草をするのも機械で簡単に済ませることができる点などを長所として挙げてくれた。なお、以前はニンニク栽培をしていたが、ブロッコリー栽培に比べて非常に重労働であったという。
- 5) 「みとよのみ」ホームページより（<https://www.mitoyonomi.jp/>）(2022.8.7 最終閲覧)。

文献

- 香川県園芸特産課編, 1993, 『園芸特産行政 30 年のあゆみー園芸特産課設置 30 周年を記念してー』香川県園芸特産課。
- 香川県農業史編纂委員会編, 1977, 『香川県農業史』香川県農業改良普及会。
- 香川県農林部, 1980, 『地域農業計画ー農業改良普及推進のためにー(三豊農業改良普及所管内編)』香川県農林部。
- 香川県農林部園芸特産課編, 1973, 『香川の園芸 1972』香川県農林部園芸特産課。
- 香川県農林部園芸特産課編, 1983, 『香川の園芸特産 昭和 58 年 12 月』香川県農林部園芸特産課。
- 香川県三豊農業改良普及所三豊農業改良普及協議会, 1974, 『昭和 49 年度農業改良計画資料 三豊地区の農業現況』香川県三豊農業改良普及所三豊農業改良普及協議会。
- 財田町誌編纂委員会編, 2005, 『財田町誌 続編』財田町。
- 坂知樹, 2021, 「流通構造の変化と産地への影響」板橋衛編, 『マーケットイン型産地づくりと J Aー農協共販の新段階への接近』筑波

書房, 39-60.

- 新修大野原町誌編さん委員会編, 2005, 『新修大野原町誌』大野原町。
- 新修財田町誌編纂委員会, 1992, 『新修財田町誌』財田町。
- 中国四国農政局香川統計情報事務所編, 1979, 『香川県主要農作物累年統計書 昭和 54 年 市町村別』中国四国農政局香川統計情報事務所。
- 中国四国農政局香川統計情報事務所編, 1988, 『香川県主要農作物累年統計書 昭和 63 年』香川農林統計協会。
- 中国四国農政局香川統計情報事務所編, 1994, 『香川県果樹累年統計書』中国四国農政局香川統計情報事務所。
- 中国四国農政局香川統計調査事務所編, 1994, 『第 41 次香川農林水産統計年報』香川農林統計協会。
- 中国四国農政局香川統計情報事務所編, 1998, 『香川県主要農作物累年統計書 平成 10 年』香川農林統計協会。
- 中国四国農政局香川統計情報事務所編『香川農林水産統計年報』香川農林統計協会, 各年度。
- 中国四国農政局三豊統計・情報センター編, 2006, 『三豊地区市町別主要農畜産物累年統計書 昭和 40 年～平成 16 年』中国四国農政局三豊統計・情報センター。
- 仁尾町誌編さん委員会編, 1984, 『新修仁尾町誌』仁尾町誌編さん委員会。
- 農畜産業振興機構, 2011, 『野菜の生産・流通と野菜制度の機能』農林統計出版。
- 農林省香川統計調査事務所編, 1970, 『昭和 44～45 年香川農林水産統計年報』香川農林統計協会。
- 三豊市, 2001, 「三豊市過疎地域持続的発展計画【令和 3 年度～令和 7 年度】」(https://www.city.mitoyo.lg.jp/material/files/group/10/01_kaso_keikaku.pdf) (2022.8.7 最終閲覧)。
- 横山忠始, 2016, 『地域内分権で 地方消滅を跳ね返せ!』ぎょうせい。

(受理日: 9 月 1 日)

(せとうち観光専門職短期大学・准教授, 助教)

Email: yusuke-yoshida@g.seto.ac.jp

yuko-taira@g.seto.ac.jp